池田全之（いけだ たけ ゆき）

学位の種類　博士（教育学）

学位記番号　教第74号

学位授与年月日　平成8年7月17日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項目該当

学位論文題目　シェリングの人間形成論研究

論文審査委員　（主査）
教授 沼田裕之　教授 増渕幸男
助教授 笹田博通

# 論文内容の要旨

本論文は，一般に教育哲学者としては扱われることの少ないシェリング（Schelling, F.W.1775-1854）の哲学を人間形成論として読み解いてみるときに見えてくるシェリング哲学の現代教育哲学的意義を明らかにしたものである。

シェリングの哲学は難解で，その多様な様相を統一的に理解するためには，シェリングの中に「生成する哲学」を認めるか，或いは，統一的理解は諦めて，或る時期の著作に焦点を当てて，そこに何らかの意味を読みとろうとするか，のどちらかになってしまう傾向がある。筆者は，どちらかといえば，後者の立場を取り，「人間が時間の中で世界を経験し，同時にまた，社会の中にあって自己形成して行く存在であること，このような人間形成に通底するのは，既存の自己を乗り越えて行く超越の営みである」という人間形成に関する事実についてシェリングの哲学から何を読みとることができるか，を探ろうとする。

シェリングは18世紀末から19世紀初めにかけて，ヨーロッパで「理性」の哲学が盛んであった時代に，観念論者として，非合理的なものを信じつつ，それを何とかして理性の力で説明しようと苦闘した。その合理的に説明され得ない「何か（etwas）」は「絶対的自我」であったり，「主体としての自然」であったり，「絶対的同一性」であったり，晩年には「無」であったりする

が，何れにしても，「近代」の原理である「理性」を再吟味しつつ，「理性」を放棄せずに，人間の問題を解明しようとするのである。

「はじめに」と題された第一章と，「シェリングの哲学を考察するにあたって」という第二章は全体の導入であり，人間形成論を扱う前に，先ず，シェリング哲学の全体像を示そうとする。シェリングのような包括的な哲学者の場合，個々の思想，例えば「教育」に関する思想を理解しようとしても，それを全思想体系の中で取り上げなければ，正確な著者の「教育観」を理解することはできないからである。この章では，存在論と認識論の観点からシェリングの人間理解を素描している。本論のために準備となる章である。

続く第三章は「自然，美，人間存在」と題されている。教育は人間が世界を経験する場の中で行われるが，その「世界」としての「自然」との関係をシェリングがどう捉えているかを解明する章である。前期哲学の中心的関心であった自然認識の問題を中心に論じられ，対象としての自然がもっている以上の意味を創造する「模倣」こそが，人間の活動の基本である，とされる。人間が主となって，自分とは異なった，疎遠な「自然」を客観的に意味づけるのではなく，逆に自然に自らを同化されることこそ，人間にとっての世界のあり方なのである。

第四章は「人間形成と時間」である。人間形成は時間の中で行われるが，その「時間」とは一体何なのか，という議論である。常識的で客観的な「時計の時間」ではない内的な時間こそ人間の実存に結びついた時間であるが，瞬間ごとに決断を方向付ける理念としての「未来」と，非本来的な自己としての「過去」とが区別されつつ，時間というものは生成されて行く，という考え方を示した『世界時代』（遺稿）執筆時のシェリングと，むしろ未来の意味は過去から照射されるはずである，という回想としての時間を主張する『芸術哲学講義』（1802）でのシェリングとが対比され，後者の中に，現代の時間論，とりわけベンヤミンに通じる時間論を筆者は見ようとする。そして，このような時間の捉え方こそ現代の教育の場に必要である，というのが筆者の主張したい点である。

第五章は「教育的行為論としてみたシェリングの哲学」と題されており，自他関係論，或いは教育的行為論としてのシェリング哲学の様相が明らかにされる。絶対的な主体としての他者に出会うとき，我々は自分の無知を自覚し，「脱自」によって人格的なものとの「出会い」を経験しなければならない，という現代の教育でも必要な教育者と非教育者との関係論を，シェリングの中に読みとることができる，とされる。

議論の最後は第六章「超越と知識」である。教育は絶えず今此処にある自分を超えて行くところに成立する。その超越とは何か，がここで解明される。ここではフィヒテの哲学との関係で，シェリングの超越に対する姿勢が明確にされるのである。つまり，紆余曲折はあるものの，シェリングにとって，未熟な自己を超越して行く場合に，超越とは自我性を放下していくことである，

という結論に向かう，というのである。

ただし，絶対的な存在に向かって自我を放下するとはいっても，それが神秘主義になってしまうと知識の意味が分からなくなってしまう。シェリングの場合には，知識を放棄するといっても，それは一応旧来の理性的所産の妥当性を括弧に括るということであって，それを全く放棄することではないのである。むしろその知識を，神話による表象的な知識の補助と捉える必要性が説かれる。つまり，理性の限界を自覚しながら超越的なことがらを理性の内容にしようとする，困難な，しかし，あくまでも理性を放棄しないシェリングの立場がここに見出されるのである。

理性を信じることができ難くなっている現代，合理のそこにある非合理的なものを求めつつ，しかもなお理性を放棄しないシェリングの哲学は，人間形成を哲学的に理解しようとする際に，現代の我々に教えるものを多くもっている，と筆者は主張したいのである。最終第七章「おわりに」は全体のまとめである。

## 論文審査結果の要旨

本論文で筆者が主張しようとしている論点は明快である。ドイツ観念論哲学者として有名でありながら，教育哲学者としては殆ど取り上げられることのなかったシェリングの思想を人間形成論として読み解いてみると，現代の教育問題を考える鍵となる重要な思想を見出すことができる，とした上で，人間と環境（自然），或いは人間と時間の関係，他者性の問題，超越の問題，さらに理性的な知識の問題などに関するシェリングの思想を明確にし，それらが，現代の教育を考え役に立つことを示したのである。

筆者の観点から見たシェリングは，一言で言えば，いかにその信頼が揺らぎ始めたとはいえ，基本的に合理性を基にしている現代社会，或いはその中での教育の営み，の限界を，近代合理主義が始まった直後に既に直感して，それを理論づけようとしたのである。

筆者はその哲学を人間形成の観点から再生させようと試みたが，これは，我が国の教育哲学界では，これまでになかった試みである。ドイツ観念論者として，ロマン主義教育思想に影響を与えたものとして，名は挙げられることがあったにしても，それ以上の研究がなされてこなかったシェリングの教育に関する思想を，彼の全思想の中に位置づけ，現代教育哲学に寄与できる様相を明らかにした功績は大きい。

ただし，問題がないとは言えない。特に，人間と世界，或いは環境，との関わりを論ずる際に，自然世界と人間との関係について，主観としての人間の立場を強調するのではなく，むしろ自然の側に人間が没入して行くべきことを示唆している点など，シェリングの思想は優れた現代的意

味を持っているが，現代の人間にとっての最も直接的な環境は「社会」であり，その「社会」との関係で人間がどう生きていくべきかを考えることなしに現代の教育は成り立たない。ところが，この「社会」の側面がこの論文では論じられていない。というより，シェリング自身にとってその問題はおそらく二義的であったのである。にもかかわらず，本論文の筆者が現代教育の問題を解決しようという問題意識を強く持っているのであれば，この点への論究は不可避だったはずである。

もっとも，シェリングについては未だ完全な全集も出版されていない事実を考え合わせれば，現在の時点で，ここまでシェリングの人間形成に関する思想を浮き彫りにした努力は十分に評価されなければならない。我が国において，殆ど初めて，シェリングの教育哲学を明らかにした点で，また，その教育哲学が現代教育の問題を解明する上で十分に役立つことを示した点で，本論文は博士論文に値する。よって，博士（教育学）の学位を授与するに適当と認める。